



LAOS UPDATE

>>>03 2015 | Vol. 11

「オールジャパンでラオスらしい発展を」

JICAラオス事務所 新所長 村上雄祐

5年ぶりのラオスとなった今回、首都ビエンチャンに来てまず感じたことは、活気ある街や人々、多数の外国人観光客の姿、車両の増加などダイナミックに発展しているラオスの姿です。近年は日系企業の進出も目覚ましいものがあり、駐在日系企業数も111社と過去5年間で約1.8倍に増加し、経済発展や社会の変化は更に加速していくと思われます。

ラオス政府は、第7次社会経済開発計画(2011年～2015年)の中で、経済成長率8%以上、2020年までに最貧国(LDC)からの脱却など経済発展を急務としつつも、社会・環境に配慮したバランスのとれた経済成長による持続的開発を目指しています。2015年は日ラオ外交関係樹立60周年及びラオスへの青年海外協力隊派遣開始50周年を迎え、JICAにとって記念すべき節目の年となります。JICAは、ラオスの持続的な発展、特に環境にも配慮した経済成長の促進を支援するため、ラオス国民、各国の開発パートナー、NGO、日本の企業や団体など様々な方々と連携しながら協力を進めてまいります。



【妊産婦と乳幼児の命を守るために ～JICA技術協力プロジェクトの取り組み～】

「37%」、この数字はラオスで医療従事者(助産師、医師など)を介して出産をしている妊婦の割合です。つまり、裏を返せば、何とラオスの国民のほぼ10人に6人が専門家の介助なしに出産しているのです。

ラオスは妊産婦死亡率、及び5歳未満児死亡率は近年改善傾向にあるものの、東南アジア諸国の中では最も悪い水準となっており、依然として母子保健の改善は急務とされています。

このような状況を改善すべく始まったJICAの技術協力プロジェクト「母子保健統合サービス強化プロジェクト」(2010年～2015年)は、特に数値が悪い南部4県(チャンパサック県、サラワン県、セコン県、アッタプー県)を対象として県・郡保健局の母子保健事業運営能力強化、及び母子保健統合サービスの改善を目指してきました。サービスの改善に関して、9つの指標(家族計画・妊産婦健診・施設分娩・妊産婦への鉄剤投与・子どもに対するビタミンA・駆虫剤の投与・保健スタッフの介助による出産・妊産婦への破傷風予防接種・出産後の健診)の目標数値を設定すると共に、その目標達成に向け県・郡保健局のマネジメント能力強化、またサービス提供能力の強化等に対する支援を行ってきました。以前は上部機関から指示されたことを実施するだけだったのが、目標に向けた活動の進捗状況が一目で分かる年間活動計画などが導入され、活用されています。その結果、設定した指標は概ね改善傾向にあります。一方、プロジェクトを行う中で、医療施設までアクセスできない住民をどう取り込んでいくのかも課題として見えており、今後もコミュニティ全体を巻き込んだ母子保健活動が必要とされています。



アウトリーチ活動では村落部での妊産婦及び乳幼児健診を実施。



専門家による技術指導の様子



保健局職員による会議。彼ら自身で計画を立て活動を実施するようになりました。

>>>News Update

ビエンチャンの「歴史的地区」の街並み維持へ

1月31日(土)、2月1日(日)、7日(土)、8日(日)の4日間、ビエンチャンにおいて、市・郡が主体となり、市民や観光客が「歴史的地区」の街並みの魅力をアピールするためのイベント「ビエンチャントライアル」が開催されました。同イベントは、ビエンチャンの歴史的街並みの保全・活用に向けた意識を高め、地域住民や事業者が主役となった景観形成の取組を促進していくことを目的に実施され、JICAは都市開発管理プロジェクトのもと、ワークショップやイベントの構成、実施における技術的支援を行いました。

イベントでは、ビエンチャンの歴史的地区にあり、観光客が多く訪れるChao Anou通りとFrancois Ngin通りを中心に、普段は車通りの激しい場所を歩行者へと開放して、ウォークラリーや天井のない美術展など、様々なアクティビティを行いました。特に印象的だったのが、車いすの方々を多く見かけたことです。普段の道路は車いすでは通行が困難ですが、このイベントを通じて「すべての人が住みやすい街とは何か」ということを考えるきっかけとなったのではないかと思います。これからもより多くの市民や観光客に、楽しみながら街の魅力を再認識してもらい、首都ビエンチャンが将来にわたって歴史的地区の街並みを維持していけるよう人々の理解が深まることを期待します。



歴史的地区の説明パネル。ラオス国立大学の学生が観光客や地元の人を案内するツアーも開催されました。



障がい者によるパフォーマンス

子どもの歯を守れ！「ラオスチャーガンじゅ一学校・地域歯科保健プロジェクト」

琉球大学による草の根技術協力事業「ラオスチャーガンじゅ一学校・地域歯科保健プロジェクト」(2012年～2017年)の一環で、セタティラート病院及び琉球大学の歯科医師による歯科検診がプロジェクト対象校にて行われました。2012年9月から始まった同プロジェクトでは、年に二回対象校にて児童の歯科検診を行っています。低学年の児童ほど虫歯率が高く、中には23本のうち18本が虫歯に感染している生徒もいました。ラオスでは「乳歯はどうせ抜けて生え変わるのだから」と、子供の歯の健康をあまり気かけない保護者が多いですが、虫歯のまま放っておくと永久歯が虫歯になりやすくなったり、あごの発達を阻害、また偏食になりやすくなったりと将来の健康に大きな影響を与えます。検診後は保護者に結果を通達し、子供の歯の健康への意識を高められるよう保護者への指導も行っています。またプロジェクト終了後も学校、保護者が自発的に歯磨き指導を行っていけるよう、今後ガイドラインやマニュアルを作成し配布していきます。



琉球大学の歯科医師2名も検診に参加しました。



検診の後は染め出し液を塗って丁寧に歯磨きをします。



磨き残しがないか鏡でチェック。

「協力隊は私の家族そのもの」

プアンさん(JICAラオス事務所職員)



プアンさんがJICAラオス事務所に入ったのは1990年。当時のJICA事務所はまだ青年海外協力隊調整員事務所と呼ばれていました。プアンさんはそれから24年間にわたりJICAボランティアの調整業務や事務所総務関連の任務を担ってき、今年3月に定年退職を迎えます。

プアンさんにとって協力隊員は、「兄弟、姉妹、友達であり、家族そのもの」と言います。「赴任したばかりの協力隊員は、よく私のところにラオス語の質問をしに来たり、逆に私からラオスの文化について彼らにアドバイスをすることもありました。彼らはとても一生懸命ラオスに馴染もうとし、どんなに環境が厳しい赴任地であっても前向きにひた向きに任務を全うしようと努力しています。」

青年海外協力隊がラオスに派遣開始されてから今年でちょうど50年。以後のべ700名以上のボランティアが同地で活動しました。現在では医療、教育分野をはじめ様々なセクターでラオスの発展と国造りに貢献しています。

今月JICA事務所を去るプアンさん。しかし歴代の協力隊員と築き上げた絆は今後も切れることはありません。

「物を供与するだけでなく、技術を教える。それが協力隊の良いところです。」とプアンさんは言います。「物は年月が経てば壊れてしまったり、使い物にならなくなってしまうが、協力隊が教えてくれた技術や知識は生涯にわたってラオス人の中で生き続けます。その技術や知識こそがラオスの発展に必要なものなのです。これから赴任する協力隊員も、先輩達のように高い志を持ってラオスのために頑張りたいと思います。」



♪協力隊50周年イメージソングの制作♪

青年海外協力隊発足50周年を記念して、同事業のイメージソングを制作します。楽曲を手掛けるのは普段から精力的に慈善活動に取り組んでいる人気ロックバンド、アンダーグラフ。今回メンバーの皆様がラオスを訪問しました。視察期間中、協力隊の活動現場や現地の小学校を訪問し、曲へのイメージを膨らませました。同曲は複数の著名人もコラボレーションとして参加します。曲の完成後、CD販売されるほか、日本国内で行われる50周年記念式典、ラオスでは11月のJapan Festivalなどで隊員や関係者によって披露される予定です。お楽しみに！

ラオス事務所から

1月6日にJICAラオス事務所に着任した、藤澤冬詩(とし)です。企画調査員(ボランティア)の任に就いております。私自身も2010年1月から2年間ラオスで青年海外協力隊として活動をしておりましたので、勝手知ったる場所に戻ってきた、そんな嬉しさがあります。一方で、隊員時代には当たり前のように感じていたJICA事務所によるボランティア事業への支援が、こんなにも多くの人・手間がかかって成り立っていたものだったのかと、今になって学んでおり当時のことを反省することしきりです。自分が隊員時代に何の憂いもなく楽しく過ごせたように、現在ラオスに派遣中のボランティアさんたちが「いい時間」を過ごせるように、しっかりと後方支援をしていきたいと思ひます。



おことわり:本ニュースレターはJICAラオス関係者を対象としたものであり、JICAラオスの活動内容及びニュースの共有を目的とし、約3ヶ月に1度を目処に発刊しています。ご意見・ご質問は事務所総務・広報班までお願いします。(担当:木村、前納)